

「学校蔵」の尾畑酒造専務

閉校した佐渡市の旧西三川小学校を再活用した「学校蔵」を舞台にした「学校蔵の特別授業」(日経B.P.社)が出版された。著者は佐渡市真野新町の尾畑酒造専務の尾畑留美子さん(50)。有識者との対談やこれまでの取り組みを振り返り、「東京をゴールにしない」などと、地方の未来を考えるヒントを盛り込んだ。

「学校蔵の特別授業」を著した尾畑留美子さん(佐渡市西三川)



地方の未来 蔵から提言

活動や対談一冊に 「外部と課題共有大切」

学校蔵は、市から旧校舎を借り受けた尾畑酒造が2014年に開設した。酒の仕込みのほか、酒造り体験の受け入れなどに取り組んでいる。毎年、佐渡や地方の未来を考える「特別授業」を開催している。「里山資本主義」などの著作で知られる日本総合研究所(東京)の藻谷浩介主席研究員らを招いている。

出版は尾畑さんが日本酒のイベントで知り合った編集関係者から打診を受けたのがきっかけ。学校蔵を造った経緯、対談、取り組み

の大きく3部に分かれる。

過去2回の特別授業でゲストを務めた藻谷さん、コンサルティング会社BOLBOP最高経営責任者(CEO)の酒井稜さん、東京大学社会科学研究所の玄田有史教授の3人と尾畑さんがあらためて対談した内容を収録した。

対談では3人から、20代は都会で経験を積み、30歳前後で「素早く」地方に戻る「Vターン」の勧めが語られている。また都会から地方への移住を考

える上では「いいところを売り込む『魅力発信モデル』よりも、一緒にあって地域の問題に取り組んでもらう『課題共有モデル』の方がつながりが強まる」などの提言もあった。

尾畑さん自身は、学校蔵を始めるところに決めた理由を、地元で「日本一」がきれいな小学校」と言われた旧西三川小からの眺望に心を奪われ、「やらねばならぬ」と感じたと振り返っている。

尾畑さんは「日本の縮図と言われる佐渡で考えたことは日本中に通じるはず。地方賛歌ではなく、地方通いの勧めのような、等身大でリアルなストーリーがある」と話している。

一部カラーで208ページ。1600円(税別)。